

森松グループ

MISSION

想い、つくり、つなぐ。

【森松グループミッションへの想い】

「想い、つくり、つなぐ。」とは、まず「想い」があるところからはじまるということです。

想いとは自分自身の強い気持ちであり、社会貢献に繋がるもの。

お客様の要望に応えたい、困り事を解決したい、世の中に新たな価値を提供したい。この想いが原動力となります。

「つくる」ことは形の無いところから形をつくるまで、企画・提案も含めたものづくりです。

お客様の望む材料を提案・提供する、製品まで完成させる、自身で考案した商品を提案し製造する。

想いを形にすることがつくることです。「つなぐ」とはヒトとヒト、モノとヒト、モノとモノをつなげ、

新しいものを生み出すことです。交流し、紹介し、組み合わせることで我々の活動する世界が広がり、

より良い世界をつくることができます。

「想い、つくり、つなぐ」

森 直樹（社長）



今年の酷暑から一転して、各地で大雪の降る冬となりました。名古屋でも雪が度々降り、厳しい寒さを感じております。雪国の運転と言えばタイヤチェーンですが、金属製のチェーンが私の印象でした。ところが最近では、取り付け方法がより簡単になった布製のタイヤチェーンもあるということを知り、調べたところ、ノルウェーのオートソック社が開発し、2000 年より発売しているとのことでした。メリットとして、金属製チェーンと比較して簡単に装着可能で、振動や騒音も少なく、そして軽量とのことでした。素材はポリエステルで、高耐久な素材が世の中に出てきたことで、布製のタイヤチェーンが現実のものとなりました。アイデアが技術の革新とともに実現すること、布製のタイヤチェーンを作るという発想、そしてまず想いを思い描くことの大切さ、想いを持つことの大切さを改めて感じました。新年に配布した「クレドノート」では、森松グループの新たなミッション・ビジョン・バリューを説明しています。我々のミッション（目指すべきところ）は「想い、つくり、つなぐ。」です。世の中にまだ無い新しいものを作りたいという想い、我々にはそれを実現することができる力があります。クレドノートはメモ帳としても使えるものになっておりますので、利用してもらいつつ、新たなミッション・ビジョン・バリューも浸透させていきます。

奇跡のバックホーム

安井 浩二（企画営業部）



映画『栄光のバックホーム』に先駆け、元阪神タイガース・横田慎太郎さんの28年の人生を描く特別番組『奇跡のバックホーム』の放送を観て、何度も泣いてしまいました。横田さんは2013年に阪神入りし、将来を期待された逸材でしたが、2017年に脳腫瘍を発症。18時間の手術後、厳しいリハビリに向き合い、再びグラウンドに戻ることを目指し続けます。しかし、野球続行が困難となり、2019年に引退を決意。引退試合では1096日ぶりの公式戦出場で、視力が戻らぬ中、センターからノーバウンド送球を本塁へ。滑り込んできた走者を見事にタッチアウト!これが“奇跡のバックホーム”として、多くのファンに深い感動を与えました。引退後は脊髄腫瘍との再闘病。そして、退院後は自身の経験を活かし、「苦しむ人の力になりたい」と講演活動をしていましたが、脳腫瘍が再発。残念ながら2023年に28歳で逝去しました。同年、阪神がリーグ優勝を決めた試合では、同期の岩崎優投手が横田さんの心の支えだった「栄光の架橋」を登場曲に選び、甲子園球場では多くのファンが大合唱。当時、リアルタイムでTV中継を観ていましたが、横田さんが亡くなったことは知っていたものの、それまでの苦悩があったことは知らず、このシーンを見て思わず号泣。映画も観ましたが、この特別番組の方が横田さんの貴重映像や家族の独占インタビュー、チームメイトの秘話などがリアルに伝わってきました。死に直面しながらも逃げずに必死に生きる姿に感動しました。また、奇跡は偶然ではなく、日々の積み重ねが呼び寄せるものだと思います。心身の健康に感謝し、当たり前前に生きている今日を大切にしようと、勇気を頂いた内容でした。

十数年ぶりのバスケ

伊東 義弥（特販部）



中学一年生の息子の影響を受け、昨年11月から十数年ぶりにバスケットボールを始めました。たまに息子にバスケを教えているうちに、自分もどれだけ動けるか挑戦してみたいという気持ちと、適度に体を動かせたらと思ったのがきっかけです。現在は、市内を中心に活動している、老若男女を問わず「楽しくバスケをする」ことをコンセプトにしたチームに参加しています。このチームの魅力は、年齢や経験を問わず純粋に楽しめる点と、人数が74人と大変多いため、行くたびに参加者が変わり、毎回新鮮な気持ちで参加できる点です。息子とも一緒に参加できるため、同じコートに立ってプレーする時間も、毎回の楽しみになっています。親子で同じスポーツに取り組むことで、普段とは違う息子の一面を見ることができるのも、不思議で貴重な体験です。実際に久しぶりのバスケをやってみると、現実はなかなか厳しく、頭の中には昔のイメージが残っているのに、体がまったくついてきません。



最初は攻守の切り替えについていだけで精一杯で、少し走ただけでもすぐに息が切れてしまいます。シュートを打ちながら、「ゴールってこんなに高かったかな?」と感じる場面も少なくありません。それでも、ボールの感触やコートの広さなど、参加するごとに少しずつ感覚が戻ってくるのを感じています。思い通りにいかない場面も多いですが、その分、シュートが決まったときや、パスがうまくつながったときは、バスケの面白さを感じられます。これからも無理せず、自分のペースで続けながら、心身のリフレッシュにつなげていきたいと思っています。

下肢静脈瘤

齋藤 直（配送部）



去年の夏、下肢静脈瘤という手術を受けました。下肢静脈瘤とは、血管がこぶのようにボコボコと盛り上がり、網目状に浮き上がる病気です。症状としては、足がだるく疲労感があり、時にははつることもあります。自分のような立ち仕事をしている人や女性に多いと聞きました。しかも、再発もするそうです。父も同じように血管がボコボコして、着圧ソックスを履いていたのを思い出しました。毎日着圧ソックスを履く手間や、年齢がまだ若いこともあり、手術で治るならと決意しました。部分麻酔を数十回打ちながらメスで切開し、そこからワイヤーを用いて弁不全を起こした静脈を引き抜く手術です。数時間の比較的簡単な手術でしたが、包帯をぐるぐる巻きにされ、その日は歩けないため、一泊二日で入院してきました。入院自体は中学生以来でした。ちなみにその時は交通事故で足を骨折し、一か月ぐらい入院していました。術後の診察も良好で、今は痛みもなく元気に過ごしています。今回のことで、健康は当たり前ではないと実感しました。お酒だけはやめられませんが、今は食事に気を付け、ジムに通い、来月は人間ドックで検査を受け、少しでも元気でいられるように過ごしています。皆さんも、ちょっとした違和感をそのままにせず、自分の体や年齢に向き合って過ごしてください。



クリスマス会

橋野 徳明（製造部）



僕の少年野球クラブチームでは、毎年恒例のクリスマス会を行っています。昨年は会場の都合により、12月14日に行いました。午後4時、子供たちの「メリークリスマス!」という大きな声と共に、クラッカーを鳴らして始まるクリスマス会。お母さんたちが朝から支度をしてくれた美味しい料理を頂き、子供たちが個々に用意したプレゼントが景品になるビンゴゲーム。一人でもグループでもステージに上がって、一発芸、ものまね、特技などを披露し、みんなから拍手が多いとチームからプレゼント。誰が何回やってもOK。6年生（Aチーム）、5年生（Bチーム）、4年生（Cチーム）の順番に監督とじゃんけん大会をして、各チームで勝った三人は監督からプレゼント。最後は、飾り付けや料理などを用意して頂いたお母さんたちに感謝とお礼の言葉を伝えて、6時30分に終了。昨年は人数が多いこともあり、全員を会場に入れられなかったため、4年生から6年生までの参加で行い、3年生以下は練習後、クリスマスプレゼントを渡して解散にしました。4年前は全学年で10人しかいなかったチームも、今は全学年で46人。とても有難いことです。ただ、各チームの試合や練習場所のスケジュール、キャンプ（昨年は観光バスで移動）、今回のクリスマス会などのイベントの段取り、チームの運営費の管理など大変ですが、これからも子供たちのために、野球を通じて楽しいイベントを行っていきたいと思います。



森松グループ 新入社員のご紹介

名前：清水一輝（しみず かずき）

趣味：旅行・映画鑑賞

自己紹介



9月から入社させていただきました、清水と申します！

前職では塗装用資材などを取り扱う商社にて配送の仕事をしていました。

森松でも今まで培ってきた配送の経験や知識を活かせると思い、

お世話になる事になりました。

DRIVE SAFELY.

まだ慣れないこともありご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが

安全運転に気を付けて頑張りますのでよろしくお願いいたします。

激痛

藤木 方子（森松産業）



昨年のお盆休み前くらいに、左手が痛くて接骨院に行き、腱鞘炎と言われました。筋膜リリース、低周波、電気治療、マッサージなどを毎日してもらい、2ヶ月たった頃、次は親指がバネ指になってしまいました。先生から、バネ指の主な原因の説明をしてくださいました。バネ指とは、指の付け根の屈筋腱（くっきんけん）と腱鞘（けんしょう）に炎症が起きる腱鞘炎の一種で、腱鞘トンネルを通りにくくなり、曲げ伸ばしの際に引っかかりや「カクン」というバネ現象が起こるそうです。女性は特に起こりやすく、更年期による女性ホルモンバランスの変化や、手を使う仕事も関係なくもないといわれました。一番辛かったのは、洗い物をする時にお皿やお茶碗を持つのも痛く、フライパンを持つのも痛くて嫌でした。仕事をしているときも、バネ指になってしまい、戻すために親指を引っ張り上げるのが、すごく痛くて嫌でした。先生が言うには、注射を打つ方法もあるが個人差があり、注射を打って3ヶ月でまたバネ指になる人もいれば、1年は大丈夫な人もいて、人それぞれだと言われました。その注射が半端なく痛いそうで、注射を打つのはやめました。今は家事もできるようになり、治療も週1回になって、少しは楽になりました。先生によると、あまり無理をすると、またバネ指になりやすくなると言われたので、週1回でも電気治療やマッサージに通い、いつもの愉快的なメンバーで呑むのが、ストレス発散にもなり、手の痛みを忘れるくらい呑んで楽しめる時間を大切にしています。

